

# 駅伝実況中継における間投詞「さあ」の談話機能

櫻井悠河(立命館大学学部生) 西岡亜紀(立命館大学) 岡本雅史(立命館大学)

## 1. はじめに

スポーツ実況中継においてアナウンサーによる実況は欠かせない。アナウンサーは目の前で起こった出来事を瞬時に言語化し視聴者に伝えているが、ただ言語化すればいいという訳ではなく実況すべき内容の取捨選択をする必要がある。劉・細馬(2016)はカーレースにおける実況を行う情報の選出方法について、気付きを示す「あ」や「おっと」という間投詞を発することでその直前に起きた出来事を直ちに実況すべき内容としていることを明らかにした。つまりスポーツ実況中継において、間投詞は重要な役割を担っていると考えられる。

そこで本研究では、駅伝実況中継におけるアナウンサーの発話に着目し、間投詞「さあ」の出現頻度や出現位置、レース展開による出現頻度の違い、「さあ」に後続する発話の文法的特徴に基づく談話機能等を調査する。これにより、「さあ」が駅伝実況中継においてどのように聞き手の状況理解や注意喚起を促しているかを明らかにすることを研究目的とする。

## 2. 関連研究

森山・張(2002)は「さあ」の意味用法について、「動作発動用法」「時期到来用法」「留保表示類」があるとした。また、「さあ」に後続する発話について「禁止や否定といった動作の不在を表す文は基本的に存在しない」(森山・張 2006: 133)と述べている。しかしながら駅伝実況中継では例えば次のような例はこの主張に反している。

(1) 00:56:33 実況 (2号車) さあこの集団は前についていくことはしません

また、西本ら(2006)は競馬のラジオ実況でアナウンサーが「さあ」を多用していることについて、レースの開始や新たな展開などを伝達し、視聴者の注意を引いていると指摘している。岡田(2002)も同様に、アナウンサーは〔さあ〕+〔未来の出来事〕という形式でこれから起こる出来事に対して視聴者を注目させると主張している。しかし上で示した例では選手らは前を追うという行動を起こしていないためレースが新たな展開を迎えているとは言い難い。加えて、この例では「さあ」に後続する発話について、これから起こる出来事ではなく現在起きている出来事について実況されている。そのため、岡田(2002)が示した形式から逸脱している。

以上のように駅伝実況中継ではこの主張に当てはまらないものが出現しているため、駅伝実況中継において「さあ」がどのように聞き手の状況理解や注意喚起を促しているか、さらには誰に対してアドレスしているのか、等の分析を通して、「さあ」の談話機能を明らかにすることを試みる。

## 3. 分析

### 3.1 分析対象とする大会の選定

分析データは2023年1月2日と1月3日に日本テレビで放送された第99回東京箱根間往復大学駅伝競走(以下、箱根駅伝)の録画放送である。尊鉢(2007)は駅伝の競技特性にチーム対抗戦であること、長距離をいくつかの区間に区切っていることの2点を挙げている。この競技特性を最も濃く備えているのは箱根駅伝である。箱根駅伝は前年の大会でシード権を獲得した上位10校と予選会から勝ち上がった10校及びオープン参加である関東学生連合の計21チームで順位が競われる。各チーム10人で編成され1区から10区まで襷を繋ぐ形式である。よって長距離を複数人で繋ぐという駅伝の特性が最も表れているため箱根駅伝を分析対象に選定した。

### 3.2 分析範囲

レース展開と「さあ」の出現頻度の関連性の明らかにするため、レース展開が極端に異なっていた1区と10区を分析範囲に選定した。分析対象とするアナウンサーの発話については、1区はスタートから全チームが2区への襷リレーを終了するまで、10区の範囲は1位のチームが9区から10区への襷リレーをするところから10位のチームが大手町のゴールに到着した瞬間までとした。データ長は1区が63分33秒、10区が81分09秒である。

### 3.3 分析観点と分析手順

ラジオの競馬実況及びモーグルの実況では、注目すべきポイントが近づいてきた時やレースに新たな展開がある時に「さあ」が使用されていることが明らかとなっている(西本ら,2006; 岡田,2002)。しかしスポーツは競技によってその試合の流れは大きく異なる。そのためスポーツ実況中継の分析は競技別に行う必要がある。本分析ではレース展開と「さあ」の出現頻度に関連があるかを確認するため、アナウンサーの実況発話の中から「さあ」が使用されていた箇所を探し、その前後の発話を含めた文字起こしを行い、「さあ」が生じた回数を集計した。そしてその集計をもとにレース展開によって「さあ」の出現頻度がどのように増減するかについて分析を行った。また、「さあ」に普通体が後続した回数も集計し、どの場面で「さあ」+普通体という形が多く用いられているかについて分析を行った。

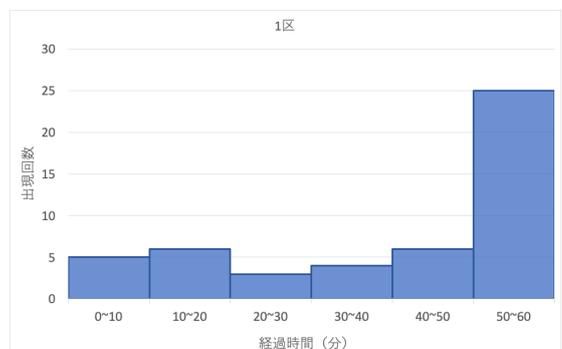
次に駅伝実況中継において「さあ」がどのように聞き手の状況理解や注意喚起をしているかを明らかにするため、「さあ」が含まれる発話の前後に着目し、森山・張(2002)が示した「動作発動用法」「時期到来用法」「留保表示類」の3種に分類した。また、これらに分類できなかった「さあ」についてどのような意味用法で使用されたのかを考察した。さらに「さあ」を含む発話が誰にアドレスされているかを分析し、これらの結果から駅伝実況中継における「さあ」の談話機能を明らかにした。

## 4. 分析結果と考察

### 4.1 「さあ」が生じた回数とレース展開による増減

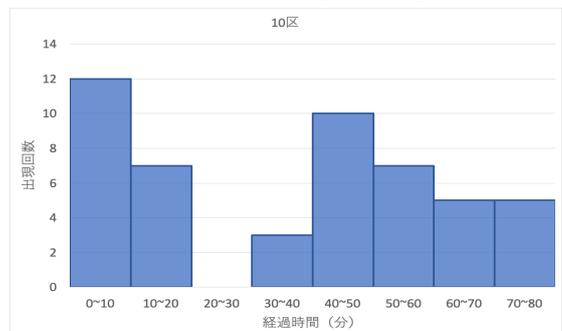
1区では63分33秒のなかで計49回「さあ」が出現した。表1は1区における時間の経過と「さあ」の出現回数を示している。この表から分かるように、50分を経過した辺りで出現回数が急激に増えている。1区のレース展開としてはスタートの直後に関東学生連合の選手が集団から抜け出し単独1位になり、以降は膠着状態が続いた。しかし50分を経過した辺りから六郷橋の登りに差し掛かり下に坂に入った瞬間、一気にレースが動いた。そしてその勢いそのまま中継所で襷リレーが行われた。

表1: 1区における時間の経過と「さあ」の出現回数



10区でも1区と同じく計49回「さあ」が用いられていた。表2は10区における時間の経過と「さあ」の出現頻度を示している。10区では特に1位のチームが襷リレーをして10分が経過するまでと40分が経過した辺りで多く「さあ」が使用されていた。0~10分の場面では9区から10区への襷リレーが行われており、3位から6位までの順位争いも起きていた。また、40~50分では10位の順位の入替わりが起きている。この場面では「さあ」が10回生じ、10区では2番目に出現回数が多くなっている。10区では9位10位11位の順位変動についてシード権に関わってくるため、注目すべき重要な出来事である。よってアナウンサーを乗せたバイクはこの位置につけ、9位争いが起きていることを実況している。1区と10区の結果から「さあ」は順位変動をはじめとするレース展開があった場所に多く出現する傾向が見られた。

表2: 10区における時間の経過と「さあ」の出現回数



また、「さあ」が含まれる発話において文末表現として普通体が多く使われていた場所について、1区と10区ともに「さあ」が多く生じた場所とおおよそ一致する傾向がみられ、こちらもレース展開に依存していることがわかった。

### 4.2 駅伝実況中継における「さあ」の意味用法

#### 4.2.1 森山・張(2002)の分類に当てはまる「さあ」

駅伝実況中継内における「さあ」について森山・張(2002)が示した「動作発動用法」「時期到来用法」「留保表示類」に分類した。まず、動作発動用法として「さあ」が用いられていたのは以下に示す1区の2回のみであった。どちらの場面も定点カメラに映像が切り替わる時に使われていた。

- (2) 00:14:25 総合実況 さあ1号車はまもなく5キロというところになりますが今トップとの差を見てみましょうか
- (3) 00:44:22 総合実況 さあその先頭の学生連合新田颯が京急蒲田のポイントに今、かつて踏切があった

ところですけれどもここでまた後ろとの差を見ていきたいと思います

(2)は文末が「見てみましょうか」という勧誘の形、(3)は「見ていきたいと思います」という意志の形になっていることからどちらも視聴者に対して定点カメラの映像に注目するという動作の発動を促している。

一方 10 区でも各中継車の映像から定点カメラの映像に切り替わる場面は何度もあったが、一度も「さあ」は用いられていなかった。これは 1 区と 10 区の定点カメラの重要度が異なっている点にあると推察される。1 区では単独 1 位の選手と後ろの集団との差を確認するのに重要な役割を担っているが 10 区では選手らはそれぞれ異なる位置におり多くの出来事が並行して起こっているため実況する情報の取捨選択が求められる。つまり定点カメラで各チームのタイム差を確認するという行為の重要度が 1 区より低いといえる。よって 1 区と 10 区で「さあ」が動作発動用法として用いられた回数に差が生じたと考えられる。

次に時期到来用法は 1 区で 10 回、10 区で 20 回使用されていた。以下は時期到来用法として用いられた実況発話の一例である。

- (4) 00:52:02 実況 (2 号車) さあここで明治が前に出ました  
(5) 01:01:40 実況 (2 号車) さあまもなく鶴見中継所がその目に飛び込んできます

(4)は明治大学の選手が前に出たこと、(5)は 1 区がもうすぐ終わり、いよいよ襷リレーが始まることを視聴者に伝えている。このように時期到来用法は注目すべき場所が来たことを視聴者に伝える役割を果たしている。また、時期到来用法も動作発動用法と同じく 1 区と 10 区で出現頻度に大きな差があったがこれは時期到来用法の出現頻度もレース展開に依存しているためと考えられる。1 区はレースの終盤の 1 カ所、10 区は 9 区から 10 区への襷リレーの場面と 9 位争いが起こっていた場面の 2 カ所で「さあ」の出現頻度が高くなっていた。よって 10 区の方がより多くレースが動く場面があり、時期到来用法の出現頻度も高くなったと推察される。

また、留保表示類は本研究で扱ったデータでは出現が確認されなかった。森山・張(2002: 135)は留保表示類について、疑念の存在や与えられた疑問文に対して回答が求められているがわからない時、または回答が要求されたがあえて答えない状況で用いることができると述べている。しかし本データでは「さあ」が含まれる前の発話文脈において疑問や回答を要求しているような例は出現しなかった。このことから留保表示類に分類できるものはないと判断した。

#### 4.2.2 森山・張(2002)の分類に当てはまらない「さあ」

最後に「動作発動用法」「時期到来用法」「留保表示類」のいずれにも分類できなかった「さあ」について、驚きを示す間投詞に置換できる例と接続詞的に使用されていた例、さらに修辞疑問文的に使用されていた例(これについては次節で取り上げる)が確認された。以下の(6)は「さあ」が「おっと」に置換できる例である。

- (6) 00:56:33 実況 (2 号車) さあこの集団は前についていくことはしません

森山・張(2002)は動作の不在を表す文について「さあ」の後に後続することはないと説明しているが、以上の例では動作の不在の形が後続している。この場面は、2 位集団から抜け出した選手をその他の選手らが追わなかったという駆伝のセオリーから逸出した場面である。森山(2002)は「おや」や「あれ」「おっと」などの感動詞を遭遇系感動詞に分類し、特に「おっと」について「事態が明らかに予想とは違う推移の仕方をしているということを積極的に示す」(森山 1996: 57)と説明している。よって通常考えられる展開から外れている(6)の例では「おっと」と置換できると考えられる。

「さあ」が接続詞的に用いられている場面はレースを通して多く確認された。以下は「さあ」が接続詞的に用いられた一例である。

- (7) 00:00:30 総合実況 大手町に応援の音が、そして拍手が、多くの期待の視線が注がれます  
00:00:39 総合実況 さあ瀬古さん、スタートの 21 人の今の動きをご覧になっていかがでしょう

(7)では実況者は「さあ」を用いて「大手町の様子」から「選手らのスタートの状態」に話題を変えている。甲田(1995)は話題の転換を行う接続詞として「さて」「ところで」「では」を挙げている。また続けて「《さて》と共に起している疑問文は純粋な情報要求文ではなく、新しい話題や課題の導入を果たしていることが多い」(甲田 1995: 39)と主張している。したがって上記のような接続詞的な「さあ」は間投詞でありながら接続詞「さて」と同じ性質を持っていると考えられる。

#### 4.3 「さあ」のアドレス先

アナウンサーが「さあ」を含む発話をした際、次に誰が発話を行ったかという点に着目し、「さあ」のアドレス先を「視聴者」「他の実況者」「解説者」の 3 つに分類した。なお同一の実況者が連続して発話をした場合、「独り言では丁寧体が用いられない」という特徴を踏まえて「さあ」のアドレス先は視聴者であると判断した。

分析の結果、「さあ」が含まれる発話は1区と10区共にほとんどが視聴者に向けられていることがわかった。また、アドレス先が視聴者以外に向けられていた時、「さあ」は接続詞的用法で用いられていた。一方、アナウンサーが「さあ」を含む発話をした際、次の発話者が他の実況者だった場合でもそのアドレス先は視聴者であると判断できるものも確認された。以下がその一例である。

- (8) 09:43:54 実況 (3号車) さあ, 区間記録を残して箱根を終わることができるでしょうか  
09:43:58 実況 (中継所) 襷を取った岸本大紀, サングラスを取った岸本大紀. 区間記録も期待がされる力走

(8)は3号車実況の次に中継所実況が発話した場面である。3号車実況の発話末は疑問形になっているが、中継所実況はその疑問に回答しておらず、中継所にやってきた選手の実況をおこなっている。よって3号車実況の発話は中継所実況に疑問の回答を期待したものではなく、視聴者に向けられたものだと考えられる。また(8)は疑問形の形式をとりながらも回答を要求していない。回答を要求しない疑問文について安達(2005)は、「話し手が、疑問文の形式をとりながらも、質問に対する答えを既に知っており、それを聞き手に強く主張するという機能を持つ」(安達 2005: 35)と説明し、このような疑問文を修辞疑問文としている。よって(8)は修辞疑問文として捉えることができる。3号車実況は「区間記録が出るかどうかはまだわからない」という回答を既に持った上でそれを視聴者に共有しており、区間記録が出るかもしれないという興味関心を引き出していると推察される。しかしながら、他の事例も含め、駅伝実況において出現する「さあ」を伴う疑問文はいわゆる反語的な意味を持つとは言い難いため、典型的な修辞疑問文とは異なる性質を持つことが示唆される。

## 5. おわりに：まとめと今後の課題

分析の結果、「さあ」の出現頻度はレース展開に依存していることがわかった。また、「さあ」に普通体が後続した回数もレースが動く場面で多くなる傾向にあり、こちらもレース展開に依存していた。そして駅伝実況中継における「さあ」の意味用法として動作発動用法、時期到来用法、接続詞的用法、修辞疑問文的用法が挙げられる。動作発動用法では「さあ」を含む発話の文末が勧誘・意志の形になっており、視聴者の注意を引く役割があり、時期到来用法は注目すべき場面がきたことを視聴者に伝達している。一方「さあ」が修辞疑問文として用いられている例では先の展開がわからないことを視聴者に共有し、視聴者の興味関心を引き出している。これは先行研究では言及されていない「さあ」の意味用法であり、レースが膠着した時間が長い駅伝特有の意味用法だと考えられる。また、「さあ」のアドレス先が他の実況者の場合、その「さあ」は接続詞的に用いられていることが明らかとなった。このことからアナウンサーは「さあ」で話題転換を行い、解説者や他の実況者が発話をするきっかけを作っていると推察される。これらのことから駅伝実況中継における「さあ」の談話機能は「視聴者の注意を引く」「視聴者の興味関心を継続させる」「解説者や他の実況の発話のきっかけをつくる」の3点であると考察される。

本研究で用いたデータは第99回箱根駅伝の1区と10区に限定したため駅伝実況中継全体の傾向とは言い難く、用いるデータによっては異なる結果になる可能性がある。また、「さて」や「おっと」ではなく「さあ」が使われた理由について本研究では明らかにならなかった。よって今後はより多くのデータを用いて分析し、考察することで分析結果に説得力を持たせたい。

### 参考文献

- 安達太郎 (2005). 疑問文における反語解釈をめぐる覚え書き 京都橋女子大学研究紀要, **31**, 35-50.  
岡本光弘 (2002). スポーツ実況の会話分析 橋本純一(編) 現代メディアスポーツ論 世界思想社 pp.153-195.  
甲田直美 (1995). 転換を表す接続詞『さて』『ところで』『では』をめぐって 日本語と日本文学, **21**, 31-42.  
尊鉢隆史 (2007). 駅伝競走における記録情報処理の変遷 関西国際大学研究紀要, **8**, 13-25.  
西本卓也, 光部杏里, 渡辺隆行 (2006). ラジオ放送番組におけるスポーツ中継の分析 信学技報, **106**(57), 27-32.  
森山卓郎 (1996). 情動的感動詞考 語文, **65**, 51-62.  
森山卓郎・張敬茹 (2002). 動作発動の感動詞『さあ』『それ』をめぐって一日中対照的観点も含めて— 日本語文法, **2**(2), 128-143.  
劉礫岩・細馬宏通 (2016). カーレースにおける実況活動の相互行為分析—出来事マーカーとしての間投詞と実況発話の構成— 社会言語科学, **8**(2), 37-52.